

## 鯉淵学園 80 年にあたり ～ 50 周年以降の 30 年間 ～

前嶋 智<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 鯉淵学園農業栄養専門学校 アグリビジネス科

キーワード：鯉淵学園，沿革，回想録

### 鯉淵学園略年表（平成 7 年～令和 7 年）

平成 7 年 (1995 年)	創立 50 周年記念式典挙行	平成 15 年 (2003 年)	(財) 農民教育協会理事長に安橋隆雄氏が就任，宍戸弘明学園長辞任，学園長に井上隆弘氏が就任，若者新規就農促進教育の研究開始，「実務経験栄養士制度」導入開始，オンシツツヤコバチ導入など全般に環境保全型農業を取り入れる（施設野菜），タマサート大学（タイ王国）との学術交流協定締結
平成 8 年 (1996 年)	「鯉淵学園教育研究報告」改題，畜産技術研修教育推進事業で黒毛和種肥育牛導入，生物系特定産業技術研究推進機構（生研機構）「新技術・新分野創出のための基礎研究推進事業」参画，IJU ターン事業	平成 16 年 (2004 年)	「農業技術演習」導入，バイオジオフィルター・ピオトープ設置，「寮制度検討委員会」設置，地域に向けた「公開授業」実施，タイ王国農務省開発普及局と交流協定締結，3 号教室棟（大教室）完成
平成 9 年 (1997 年)	週休 2 日制導入	平成 17 年 (2005 年)	60 周年記念式典挙行，鯉淵学園農業栄養専門学校と改名，農産物流通実習施設「農の詩」建設開業
平成 10 年 (1998 年)	全国競馬畜産振興会「畜産技術研修教育推進事業」助成により畜産バイオテク室整備，女子寮（菊花・花梨）完成	平成 18 年 (2006 年)	研修部創設（実技研修係・国際研修係），チャレンジファームスクール（農水省補助事業）開始
平成 11 年 (1999 年)	関東ブロック農業大学校等プロジェクト発表会開催	平成 19 年 (2007 年)	食農環境管理士試験実施，有機農業教育方法の研修会（高校教員向け）開催，鯉淵学園農業経営大賞事業記念シンポジウム「環境保全と食の安全・安心を求めて」開催
平成 12 年 (2000 年)	構内 LAN 構築，学園ホームページ開設，個人プロジェクト圃場「田んぼの会」で合鴨農法導入，「内原町肉用牛産肉能力研究会」発足，人事院給与規則「学歴区分」において 4 年制大学卒と同等	平成 20 年 (2008 年)	鯉淵学園将来方向検討会開催，花き部門廃止
平成 13 年 (2001 年)	農業体験学習事業（農業体験学習支援条件整備事業）開始，「環境保全・循環型農業の実証的研究」開始，オープンキャンパス実施，九州地区入学試験，（社）全国農村青少年教育振興会から新規就農啓発促進事業を請け負い，食品総合実験棟・農業体験学習棟・家畜糞連続発酵乾燥堆肥化処理施設完成	平成 21 年 (2009 年)	(財) 農民教育協会理事長に高橋隆三氏が就任，2 年制課程募集開始，（株）船井総合研究所と共催でウェブスクール実施，5 部門制から 3 部門制へ組織改編，プロジェクト学習導入
平成 14 年 (2002 年)	「学生食堂運営費特別会計」設置，新カリキュラム実施，有機圃場 JAS 認定取得	平成 22 年 (2010 年)	中米カリブ地域小規模農民支援有機農業技術普及事業（JICA），旧図書館を学生ホールに改修（エアコン・Wi-Fi 整備）

<sup>1</sup> 〒 319-0323 茨城県水戸市鯉淵町 5965

平成 23 年 (2011 年)	「鯉淵学園レストラン農の詩」開業, 第 53 回全国牛削蹄競技大会会場提供, 関東甲信越プロジェクト発表会開催, 東日本大震災により施設損害や体験学習キャンセル等の影響, 井上隆弘学園長辞任, 学園長に近藤博彦氏が就任	平成 30 年 (2018 年)	学生食堂昼食のみに, 東京農業大学国際食料情報学部農業総合実習受け入れ実施
平成 24 年 (2012 年)	公益財団法人移行記念寄付金募集, キャンパス整備構想「農と食と学びのテーマパーク」および教育強化計画 (24 年度～26 年度) 策定, 市民農園『鯉淵ひろびろ農園』開園, 前期試験を 8 月に移動	平成 31 年 / 令和元年 (2019) 年	(公財) 農民教育協会理事長に伊勢彦氏 / 島崎弘幸氏が就任, 近藤博彦学園長辞任, 学園長に島崎弘幸氏が就任, 高等教育無償化対応, 3 ポリシー策定, 国際農業コース開設 (タイ王国の短大卒業として認めるダブルディグリー認可), AO 入試導入, 茨城専門カレッジリーグ加入
平成 25 年 (2013 年)	(財) 農民教育協会理事長に須田哲也氏が就任, 公益財団法人移行設立, 学生の就農支援に係る三者協定 (伊那市・JA 上伊那), 研究科国内就農研究コース設置, 調理技術検定導入実施, 学生食堂支援サポートチーム新設, 「キャンパス整備研究会」開催, 先進型農業経営講座・経営者交流会	令和 2 年 (2020 年)	職業実践専門課程取得, 高等教育就学支援申請, コロナ禍により学園祭中止, 栄養士教育 50 年「Next50」プロジェクト, 農林水産業みらい基金採択
平成 26 年 (2014 年)	「畜産農場検討会」開催, 農の詩毎月イベント開催	令和 3 年 (2021 年)	専門実践教育訓練講座指定, メンタルヘルスセルフケア講習会導入
平成 27 年 (2015 年)	畜産農場の業務提携について検討, 水戸市・茨城町と新規就農者の確保育成に関わる協定締結, 学園 YouTube 開始, 外国人技能実習法定講習実施, NCS アグリサポートおよび全農茨城本部との提携, 加工品 (煎餅) 開発	令和 4 年 (2022 年)	(公財) 農民教育協会理事長に森啓一氏が就任, (公財) 農民教育協会の法人名を (公財) 鯉淵学園に変更, 旧会議室が水戸市地域文化財認定, 教職員による相互授業研究導入, 学生食堂の運用を停止
平成 28 年 (2016 年)	コンピューター総合研究所と「モーショセンサー」利用による牛の監視システムの共同研究, 「大規模牧草地を含む土地、施設を有効利用した運営方式」として産学共同モデル構築	令和 5 年 (2023 年)	島崎弘幸学園長辞任, 学園長に長谷川量平副学園長が就任, ブレンド米販売開始
平成 29 年 (2017 年)	国際農業コースの設置とイセ食品グループとの事業連携について協議, 臨床心理士によるスクールカウンセリング試行導入	令和 6 年 (2024 年)	e-ラーニング開講, グリーン教育事業 (茨城県補助), 古代米作付け, 学園ファーム設立
		令和 7 年 (2025 年)	長谷川量平学園長辞任, 学園長に平原信男副学園長が就任, 80 周年記念式典挙行, 構内インターネット環境整備, 関東ブロック農業大学校等プロジェクト発表会開催

## I はじめに

令和 7 年 11 月 21 日, 本校体育館を会場として鯉淵学園 80 周年記念式典が挙行された。式典には本校在校生, 本校関係者 (行政機関・企業・団体等) のほか, 全国からの卒業生も参加した。第 2 部では「農と食の現状における, 鯉淵学園の果たす役割」と題したパネルディスカッションが行われた。各地の卒業生をパネラーとして迎え, 本校の果たしてきた教育内容およびその教育がパネラーの現在および未来へどのようにつながっていくのか, 活発な意見が交わされた。

本校は 1945 年の開校以来 80 年, 一貫して農業

および食生活の現場で活躍できる人材を育成してきた。その足取りについて, 開学から 50 周年までは本誌で涌井が概説している。ここでは 50 周年以降の 30 年を主として本校の歩みを振り返ってみたい。

## II 50 周年まで

昭和 20 年旧満蒙開拓指導員養成所, 同幹部訓練所の施設を引き継ぎ発足した高等農事講習所が昭和 26 年から鯉淵学園と改称された。この時点で一般農業科, 農業協同組合科, 農村生活科の 3 科 (2 年制) で教育を行っていた。その後, 一般農業科・農村生活科の名称変更, 農業協同組合科の廃止などを経て昭和 45 年からは 3 年制とした。50 周年時 (平

成 7 年)には 4 年制 2 学科(農業経営科学科・生活栄養科学科)であった。また、開校以来研究科、専科、普及専攻科などを設け、普及員資格取得を含む、様々な農と食の学びに応える教育を展開していた。

### Ⅲ この 30 年のあゆみ

本校が 50 周年をむかえた平成 7 年(1996 年)以降の主な歩みを「鯉淵学園略年表(平成 7 年～令和 7 年)」に示した。この間、時代は 20 世紀から 21 世紀に、本邦でも平成から令和へと移り変わっていった。

#### 1. 学制について

平成 7 年は全国の専門学校でも数少ない 4 年制に切り替わった年であった。このときは農業経営科学科(作物・園芸コース、畜産・加工コース、経営・流通コース)および生活栄養科学科の体制で、両学科に一般専攻と普及専攻が設けられていた。なお、平成 7 年時点では 3 年制の上級課程としての普及専攻科(1 年制)が設けられていた(平成 9 年まで)。

4 年制体制は平成 20 年まで継続したが、その間両学科の普及専攻は平成 15 年で終了した。また農業経営科学科では平成 17 年から経営・流通コースを廃し、作物・園芸コースおよび畜産・加工コースの 2 コース体制となっていた。

平成 21 年度より 4 年制を改め 2 年制にするなど学制を大きく変更した。学科構成としては食農環境科、食品栄養科と両学科とも名称を一新した。また、食農環境科には有機農業コース、アグリビジネスコースの 2 コースを設けるとともにアグリビジネスコース内に就農専攻、畜産加工専攻、JA 専攻の 3 専攻を設けた。平成 24 年度には食農環境科のコースを再編し有機農業コース、アグリビジネスコース(就農専攻、畜産加工専攻)、JA コースの 3 コース(2 専攻)とした。

平成 26 年度には食農環境科の名称を改めアグリビジネス科とした。アグリビジネス科のコース編成は、作物・園芸コース(作物・園芸専攻、有機専攻)、畜産・加工コース、協同組合コースの 3 コース(2 専攻)とした。翌平成 27 年度には協同組合コースを廃止し、作物・園芸コース、畜産・加工コースの 2 コース制とした。さらに平成 30 年度には国際農業コースを設け園芸・組合コース、畜産コース、

国際農業コースの 3 コース制とした。本稿執筆時のアグリビジネス科のコース編成は平成 30 年度と同様であるが、さらなるコース編成の検討が進められている。なお、食品栄養科は平成 21 年の 2 年制課程移行時から現在に至るまで名称および学科内編成(科の下にコースを設けない)について変更されていない。

#### 2. 協会理事長(経営体制)の変遷

平成 7 年(創立 50 周年)時は二瓶博理事長であった(第 4 代理事長)。平成 15 年に安橋隆雄氏が理事長(第 5 代)に就任。平成 21 年に高橋隆三氏が理事長(第 6 代)に就任。農民教育協会経営体制の刷新が図られた。平成 25 年度は須田哲也氏が理事長(第 7 代)に就任するとともに、公益財団法人へと移行するなどさらに大きな変革を遂げた。このうち平成 31 年(令和元年)には(株)イセ食品会長の伊勢彦信氏が理事長(第 8 代)に就任し、民間企業とのつながりを強めた経営体制となった。令和 4 年度には(株)フォーカスシステムズ社長の森啓一氏が理事長(第 9 代)に就任した。

それまでの 50 年間と比較すると短期間で理事長交代と経営体制の変革を余儀なくされたのはひとえに学生数確保の困難さによる財政状況の厳しさが背景にある。経営陣は常に厳しい選択を迫られながらも最適な経営資源活用に骨を砕いてきた。

#### 3. 歴代学園長(8 代～13 代)

平成 7 年(創立 50 周年)時の宍戸弘明学園長(元畜産試験場〔現農研機構畜産研究部門〕長)は 4 年制制度の立ち上げから運営に力を入れるとともに、本誌を前誌「鯉淵研報」から「鯉淵学園教育研究報告」に発展させるなど教育・研究の発展にも尽くした。平成 15 年には井上隆弘氏(前国際農林水産業研究センター理事長)が学園長に就任され、豊富な国際経験をもとに海外研修やタイ農業協同省との連携事業などを進めた。学制上は 4 年制課程から 2 年制課程への大きな変更期にあたり、新課程の制定や旧課程からの移行と大変厳しい時期に教職員を率いた。平成 23 年には近藤博彦氏(元農林漁業団体職員共済組合理事長)が学園長に就任され、2 年制課程の定着に尽力した。前述の学制のうち現アグリビジネス科は近藤学園長在籍中に幾度となく再編を重ねた。時代の要請にこたえ、学生数確保を目指すた

めの取り組みの苦勞がしのばれる。また、キャンパス整備構想など学園の魅力創造に努めた。令和元年度には島崎弘幸氏（イセたまご研究所所長）が学園長に就任され、食品科学の学識（理学博士、元人間総合科学大学・教授）も背景に国際農業コースによる海外人材育成など新たな取り組みに力を注いだ。また、この時期より高等教育機関に求められ始めていた教育機関としての3ポリシー（アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシー）について、教職員の議論をリードしこれを策定した。以前から「教育理念」または「建学の理念」は学生要覧等に掲げられていたが、3ポリシー制定によりさらに明確化された。令和5年には長谷川量平副学園長が学園長に就任された。この30年間では唯一本校正職員からの学園長就任者であった。それまでの副学園長経験を活かし、農林水産業みらい基金プロジェクトを中心に陣頭指揮を執った。令和7年からは平原信男氏〔(公財)鯉淵学園理事〕が学園長に就任し現在に至っている。小学校校長もふくむ豊富な教育経験も活かして新たなスクールプランを策定し、80年の伝統を踏まえた人材育成に力を注いでいる。

なお、副学園長職についてはながらく在職者がなかったが、平成25年の近藤学園長在籍時に入江三弥子教授（食品栄養科）が就任した。その後平成29年には長谷川量平教授（アグリビジネス科）が副学園長に就任した。さらに令和6年には平原信男氏が副学園長に就任。それぞれ学園長を補佐し教育、学校運営にあたった。

#### 4. 教育体制の変遷

本校は設立以来単に知識・技術だけでなく指導力を備えうえて農業・農村生活をささえる人材を育成してきた。50周年時点で4年制を導入し、それ以前よりゆとりを持ちながら充実した教育内容で学ぶ環境を整えるとともに、普及指導員受験資格及び管理栄養士の受験資格をえられるものとした。2年制制度変更に伴いこれらの受験資格に代わる新たな教育の魅力・目標の創設に両学科とも試行錯誤を重ねた。現アグリビジネス科は食料・農業・農村基本法（平成11年）などで求められる農業の環境面への貢献などを念頭に置いた食農環境科としてスタートした。これを先取りする形で、全国の農業大学校等に先駆けて有機園場の認証を得ている。有機農業

教育は現在に至るまでアグリビジネス科の重点教育の一つとして継続されている。畜産教育については酪農教育にくわえ、平成7年ごろから肉用牛教育も進めてきた。その中では家畜人工授精師、家畜体内受精卵移植師といった技術資格取得にも力が入られていた。本校農業系学科では経営的な視点も重視されてきた。経営・流通コースやJAコースがそれにあたってきたほか、60周年記念事業で設立された学内農産物直売所「農の詩」と学科教育との連携も目指した。授業以外の時間に自主的に農場で管理作業などを行う学生は以前から存在していたようだ。この30年の間でもそのような学生が多数おり、時折有志がサークル等のグループを結成し「模擬農業法人」的な活動を行い、学内で生産した農産物を農の詩に出荷販売するなど、より実践的な活動を行っていた。農業技術センター（旧農場部）職員もこのため支援を惜しまなかった。

食品栄養科では50周年時の4年制課程では卒業後に受験資格が得られる管理栄養士資格取得も視野に入れた教育を展開した。平成12年には管理栄養士受験資格に求められるようになった実務経験を積むことができる制度として食品栄養科卒業後に本校食堂を活用した実務経験栄養士制度を運用し、資格取得を後押しした。平成21年度からの2年制課程においては栄養士資格取得に力を入れていく。そのなかで、現場で即戦力として求められる基礎調理技術の向上を目指した校内独自の「調理技術検定」を導入した。検定試験実施を通じ、学生の技術力が向上しただけでなく、調理作業を含む栄養士の現場に対しても自信をもって就職活動し、実際に活躍することができるなど、学生のキャリアにもプラスとなっている。また、農業系学科を併設している強みを生かした「食農教育実習」（農場実習）をおこない、食材生産現場を理解した懐の広い栄養士の育成にも努めてきた。食品栄養科では(一社)全国栄養士養成施設協会が主催する栄養士実力認定試験の受験指導にも力を入れてきた。そのなかで平成24年には本校生徒が全国2位の好成績を収めるなどの成果をあげている。

#### 5. 施設等の変遷

50周年記念事業で整備された図書館棟（1階：図書館、2階：情報処理室）は現在でも学園のシンボリックな建築物である。情報処理室は40台ほど

のパソコン端末があったが数回の更新期を経て、現在の端末数は 10 台ほどになっている。これは近年学生の持ち込みパソコンを Wi-Fi でインターネット接続して活用するケースが増加したことに合わせた対応となっている。60 周年事業で整備された農産物直売所「農の詩」は学園農産物だけでなく近隣の生産者の野菜等出荷物や全国各地の卒業生からの出品物（加工品など）も販売している。また前述のように学生の主体的な活動成果物も販売されるなど他の直売所にはない活動を行っている。教育施設として平成 15 年に食品総合実験棟が、平成 16 年に 3 号教室棟（大教室）が新たに建築された。平成 13 年には農業体験学習棟が完成。平成 22 年には学生自治会からの寄付を得ながら旧図書館を学生ホールとして改修した。令和 7 年度は鯉淵学園同窓会・学生自治会・補助事業等の支援を得ながら構内インターネット環境を整備した。このほか、耐震工事の施行や空調設備の整備などで教育環境の維持向上を図っている。また、施設整備ではないが、「旧会議室」「9～11 番教室」として活用していた満蒙開拓幹部訓練所（事務棟・講義棟）が令和 4 年に水戸市の地域文化財建造物指定を受けたことも記したい。

本校の歴史・伝統があり緑あふれるキャンパスはそれ自体が大きな財産であり続けてきた。以前から教職員・学生による環境美化作業を中心に維持管理されてきたが、平成 24 年近藤学園長によるキャンパス整備構想「農と食の学びのテーマパーク」立ち上げ以来、より積極的に取り組まれてきた。近年は現場作業経験のある理事が自ら大型作業機を用いた伐採整備作業に取り組むなど、それまでの景観資産を活かしつつ新たな魅力あるキャンパスの整備に取り組んでいる。

## 6. 研究・プロジェクト活動等

本校では創設以来、共同研究を含めた様々な研究・プロジェクト活動に取り組んできた。50 周年に当たる平成 7 年時は国による低投入型生産資材・栽培管理技術等に関する調査実験事業による木酢液使用試験を実施しており、その後も生研機構「新技術・新分野創出のための基礎研究推進事業」、「環境保全・循環型農業実証研究」「若者新規就農促進教

育研究」「農林水産業みらい基金」などのプロジェクトに取り組んだ。それぞれの研究・プロジェクト活動は、農業経営科学科/アグリビジネス科教職員、食品栄養科教職員および農場部/農業技術センター職員などの部署を横断する形で進められた。また、多くのプロジェクトはその一部を学生が授業科目「特別研究」「プロジェクト学習」で実施した。これらの取り組みにより本校ならではの実証的な研究成果による社会的貢献だけでなく、参画した職員の資質向上や学生教育にも貢献した。そのほか、食品栄養科を中心とした教育研究プロジェクトや近年盛んになっている各種受託研究など、本校の実践的な圃場・研究教育資産を生かした活動が続けられている。これら研究・プロジェクト活動についてはその多くが本誌に掲載されてきた。

## IV おわりに

以上、ごく大まかにこの 30 年を振り返った。それぞれの事項について掘り下げる点が多くあるだけでなく、農場運営の動向・学生自治会や寮生活など取り上げられなかった事項も多い。また、東海村原子力施設事故・東日本大震災・コロナ禍などによる社会的動揺が本校にどのような影響を及ぼし、本校はどのように乗り越えてきたかなど、著者の力不足で取りまとめに至らなかった。しかしながら、本稿を作成するにあたり改めて鯉淵学園が一貫したポリシーのもと果たしてきた役割の広さとそれを支えてきた学内外関係者の取り組みに思いを新たにしたい。

## V 参考文献

- 1) 財団法人農民教育協会事業報告書（平成 7～23 年度）（1997-2012）、財団法人農民教育協会。
- 2) 公益財団法人農民教育協会事業報告書（平成 24 年度～令和 3 年度）（2013-2022）、公益財団法人農民教育協会。
- 3) 公益財団法人鯉淵学園事業報告書（令和 4～6 年度）（2023-2025）、公益財団法人鯉淵学園。
- 4) 鯉淵学園学生便覧（平成 7 年～令和 7 年）（1997-2025）、鯉淵学園。
- 5) 涌井義郎（1996）、鯉淵学園の 50 年—略年表と解説—。鯉淵学園教育研究報告 12: 38-48。